

一般演題 2-1

当院の高気圧酸素治療における現状と課題
—CEの役割—

三春摩弥¹⁾ 吉岡 淳¹⁾ 石山智之¹⁾
丸藤 健¹⁾ 斉藤大樹¹⁾ 田中隆昭¹⁾
平井一郎²⁾

- 1) 山形大学医学部附属病院 臨床工学部
- 2) 山形大学医学部 外科学第1講座

【目的】

当院における高気圧酸素治療（以下HBOT）件数は年々増加している。当院でのHBOTの現状を把握し、診療科や対象疾患の推移とHBOTにおける課題および臨床工学技士（CE）の役割について検討した。

【対象】

平成24年4月から平成28年9月までに当院でHBOTを施行した患者286名を対象とした。

【結果】

男性188名，女性98名，年齢は8歳から93歳（平均63.6±16.6歳）だった。年度別の総治療件数は年々増加傾向を示した（図1）。このうち非救急適応件数が70～80%を占めていた。時間外対応件数は年度別に15件，16件，16件，24件，9件だった。診療科別では，歯科口腔外科，第1外科，第2外科，第1内科，眼科の順に多かった（図2）。疾患別では骨髄炎，ガス壊疽，網膜動脈閉塞症，難治性潰瘍を伴う末梢循環不全，イレウスの順に多かった（図3）。治療中断件数は年度別に6件，20件，8件，4件，2件で，中断理由には耳抜き不良，閉所恐怖症，気管切開患者の痰詰まりなどがあつた。また，病棟での看護師によるチェックリストを用いた身体検査が行われているが，治療直前のCEによる再身体検査により，テレメータ，体温計，カイロ，湿布，アルコール綿，綿以外の化学繊維製の下着などの持ち込み禁止物を発見した。

【考察】

CEのHBOTにおける体制強化及び勉強会等の実施により，院内でのHBOTの認知度が向上し，過去にはHBOTのために他施設へ紹介していた患者も当院で治療を行うようになり，治療件数の増加に繋がったものと考えられた。

救急適応患者は140名，非救急適応患者146名であったのにも関わらず，治療件数では70～80%が非救急適応だった。この要因としては，非救急適応患者の治療回数が多い，もしくは救急適応期間を超えての治療を実施していることが考えられた。

現在特定の診療科による治療件数の増加によって，スケジュール調整に難航することがあるため，院内でのルール決めが必要と感じられた。

【結語】

当院では年々HBOT件数が増加しているが，救急適応の症例が少なかった。CEがHBOTに携わることで治療件数の増加と安全の確保に寄与していることが示唆された。

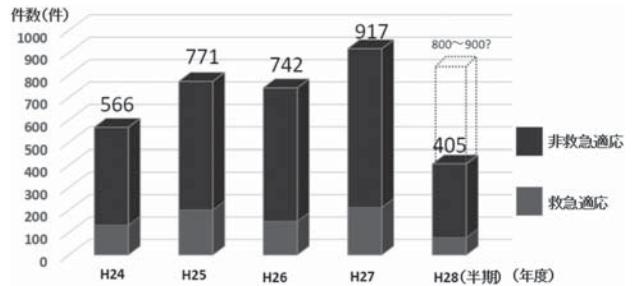


図1 年度別総治療件数

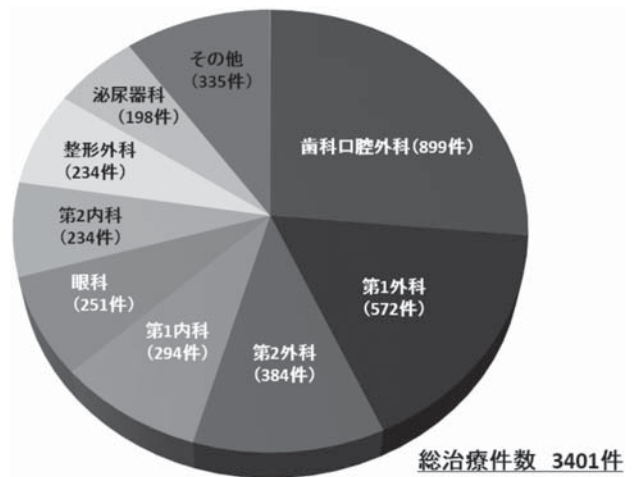


図2 診療科別治療件数

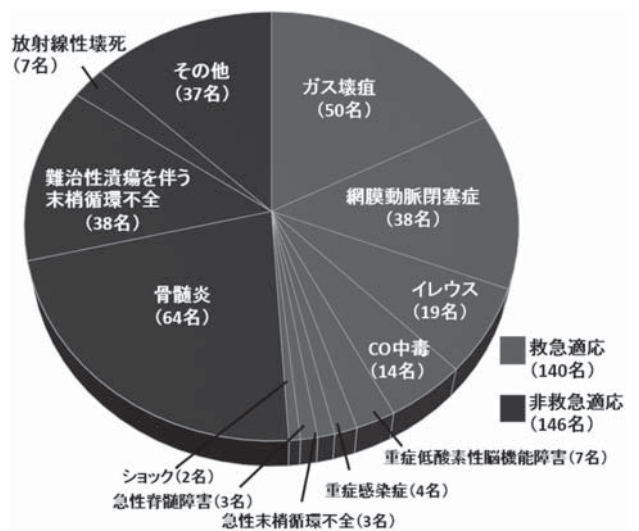


図3 疾患別患者分布